教育研究実践報告誌
2021.9 第5巻第1号 pp.18-23

# 小学校社会科 6 年生歴史分野のデジタル教科書について

井上 亘

要旨：本稿ではまず、小学校歴史教科書の内容が「天皇中心の国づくり」と「日本文化の形成」「不平等条約の改正」という 3 つの大きな流れによって構成され、これらを「人物と文物（文化遺産）」に着目して学習することになっている点を確認したうえで、紙の教科書とデジタル教科書を比較してみると、後者は前者の電子版に「デジタル掛図」のコンテンツを盛り込んだものになっている。この「掛図」は紙の教科書を開きながら教室に投影して見せる動画や図表の類であり、デジタル教科書はその教室を一冊に丸ごと再現した意味で利便性が高いといえるが、子細に見てゆくと問題が多い。本稿ではその問題点を、①教師の自主性を活かしたアクティヴ・ラーニングの実施を妨げる教科書の記述、②文物を解説する学芸員的スキルの必要性、③調べ学習に必要なインターネットの活用法などについて指摘した。

キーワード：小学校歴史教科書　デジタル教科書　人物と文物（文化遺産）
アクティヴ・ラーニング　インターネットの活用

## 1. 小学校歴史教科書の内容

小学校 6 年次の歴史は、およそ以下の 3 つの大きな流れによって構成されている。

第一に「**天皇中心の国づくり**」である。弥生時代に「三十国」が共立した**卑弥呼**の連合政権をへて、古墳時代にはヤマト政権による全国支配が展開し、飛鳥時代になると、**聖徳太子**が「天皇中心の国づくり」をめざし、蘇我氏を倒した**中大兄皇子**（天智天皇）や**中臣鎌足**らによる「大化改新」をへて、奈良時代にその国づくりが完成するという。その記念すべきモニュメントが**聖武天皇**の発願により建立された東大寺の大仏とされており [1]、その完成には僧**行基**なども協力した。

第二に「**日本文化の形成**」である。**小野妹子**をはじめとする遣隋使や、630 年に始まる遣唐使が前後 300 年にもおよぶ交流を通じてもたらした唐風文化を基礎として、**藤原道長**を頂点とする摂関政治の時代には「**国風文化**」が栄えた。その特色の一つとして**紫式部**の『源氏物語』に代表される女流文学の発達があり、江戸時代の国学者**本居宣長**が「大和心」を伝える作品として注意しただけでなく、女性が文化の中心的な担い手として活躍した、世界的にも非常に早い事例としても注目される。武士政権を樹立した**平清盛**や奇抜な戦法でこの平氏を滅亡に追い込んだ**源義経**、鎌倉幕府を開いた**源頼朝**などの活躍を描いた軍記『平家物語』は、平安の女流文学に取って代わり、武士＝男の文学を確立させた。

---

1　東大寺の大仏建立が「天皇中心の国づくり」とは関係なく、「天平のパンデミック」後の復興と救済を目指したものであることは明白であるが（吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』講談社 2011 年）、小学校の歴史の教科内容については別の機会に検証し、ここでは教科書の内容をまとめておく。

室町時代は平安貴族の国風文化をもとに、茶道や能楽など、いわゆる**日本の伝統文化**が花開く時代である。例えば、**足利義満**が建てた金閣寺は一階に貴族文化の寝殿造を用い、二階に武家様式の書院造を配するが、**足利義政**が建てた銀閣寺を見ると、一階に書院造を用いて、貴族文化から独立した形をとっている。この書院造が現在に至る「和室」の源流と目される一方、金閣・銀閣いずれの場合にも最上階には中国式のお堂が搭載され、貴族・武家政権の歴史を一貫する「唐物」崇拝の思考を体現している。中国の書画をもとに日本の水墨画を完成させた**雪舟**が活躍したのも、この時代である。

「天下布武」の印と「麒麟」の花押（サイン）を用いて天下統一を目指した**織田信長**、太閤検地で中世の荘園制を終わらせた**豊臣秀吉**、そして江戸に幕府を開いて戦国の乱世を終結させた**徳川家康**をへて天下太平の世が現出すると、三都（京都・大坂・江戸）の町人が文化の担い手として台頭し、歌舞伎や浮世絵が流行した。**近松門左衛門**は多くの芝居の脚本を手がけ、また葛飾北斎や**安藤**（歌川）**広重**らの浮世絵は当時の人々を魅了しただけでなく、遠くヨーロッパの芸術家たちに衝撃を与え、ジャポニスムとよばれる運動をひき起こした。これは前近代日本の文化が世界の文化史に貢献した唯一の事例といってよい。

一方、戦国末期に来日した**ザビエル**らがキリスト教とともに西洋（南蛮）の科学技術を伝えた後、鎖国（海禁）政策をとった幕府はやがてキリスト教を切除する形で西洋文明を受け入れるようになり、『解体新書』を訳出した**杉田玄白**らの「蘭学」が公学として認められた。明治になると、明六社の**福沢諭吉**などが「文明開化」を指導し、その啓蒙主義思想は日本近代の「国民国家」形成に大きな役割を果たした。

以上、平安末期より幕末におよぶ武士政権の歴史では執権**北条時宗**の時に起きた元寇や幕藩体制の基礎を固めた**徳川家光**の参勤交代（大名行列）などを取り上げるのみで、武士の抗争はほとんど触れられない。それは武士団が本質的に暴力団（反社会勢力）であり[2]、その権力闘争が暴力的で、小学生の教材としてふさわしくないからであろう。

第三の流れは「**不平等条約の改正**」である。幕末の**ペリー**来航に始まり、不平等条約の締結に終わった幕府の外交は国内の世論を攘夷から討幕へと転換させ、その流れは幕府方の**勝海舟**と官軍方の**西郷隆盛**の会談による江戸無血開城となって結実した。この江戸城に**明治天皇**が入り（東京遷都）、ここに「千年の都」京都の歴史が終焉するとともに、日本は再び「**天皇中心の国づくり**」へと邁進する。維新政府は富国強兵の政策を推進しつつ、不平等条約の改正に向けて国会開設と憲法制定をめざした。そうして欧米列強とならぶ国家体制を整えたあと、日清・日露戦争に勝利した日本はようやく不平等条約の改正を実現する。時に明治天皇が死去する前年であり、外務大臣は**小村寿太郎**であった。

小学校の歴史は「**人物と文物**（文化遺産）」を中心に学習することになっており、そこで扱うべき人物はこの時代で終わっている（上記ゴシックの人名）。次なる時代は「**戦争の時代**」として位置づけられており、戦後の歴史は公民の内容と重複するため、小学校の段階では以上３つの流れを理解させれば一応、事足りるであろう。このように教科内容を把握したうえで、人物と文物の知識を蓄積し、現場の状況や児童の興味関心の所在などに応じて、よりよい授業を組み立てる力を養うことが小学校教員に求められている。

---

2　上横手雅敬『日本史の快楽―中世に遊び現代を眺める』（講談社 1996 年）参照。

## 2. デジタル教科書の内容と問題点

上記のような内容を教えるデジタル教科書がどうなっているのかを、東京書籍『新しい社会 6 歴史編』（指導者用）について見てみよう。

まず紙の教科書を開くと、見開き 2 ページで大体授業 1 コマ分の内容を盛り込む。あたかも弁当箱のように、中央下に本文を置き、その上と左右に図表を配置する。つまり昔の教科書と資料集を 1 冊にした形で、ソバに薬味などを入れて食べるように（ごはんとおかず、でもよいが）、教師は図表を使いながら本文を解説する。だから図表を使えないと、子どもにソバだけ食わせることになり、はなはだマズイ授業になる。

では、デジタル教科書はどうか。まず目次を開くと、紙版とおなじ目次のページが出てくる。目次の項目をタップすると、吹き出しにページ数が出てきて任意のページへ飛べるようになっている。そのブックマーク機能は使わずに、画面下の矢印で本文をめくると、「歴史学習の基本」のあと、本編に入る。その冒頭「1　縄文のむらから古墳のくにへ」を詳しく見てみよう（下図）。

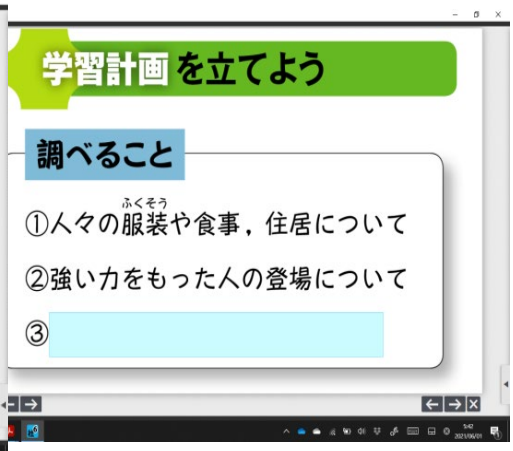
これも紙版と全くおなじだが、本文のまわりの図表に「動画再生マーク」や「地図」「コンテンツ」と書いてある。これらをタップすると動画や地図・一覧表が出てくる。

例えば、図 1 の再生マークをタップすると 1 分 30 秒ほどの動画で三内丸山遺跡の概況を知ることができる（上図左）。この見開きページには他にも 3 本の動画があり、竪穴住居や土器・石器類、貝塚について 1 分前後のコンパクトな解説を視聴することができる。これだけでも 1 コマの授業内容としては十分で、残りの時間をたっぷりアクティヴ・ラーニングに振り向けることができそうである。

この本文にリンクされている動画や図表は、実は指導者用教科書に付いている「掛図」そのものである（上図右）。そしてこの掛図は別売の「デジタル掛図」であり（Ver.4；76,000 円）、つまりデジタル教科書は**紙の教科書の電子版にデジタル掛図のコンテンツを盛り込んだもの**になっている。そもそも掛図は教室に投影して児童の理解を深める教材であるから、その意味でデジタル教科書は教室を丸ごと再現したものといえ、これ 1 つで独習できるという意味では教師いらずの教科書ともいえる。

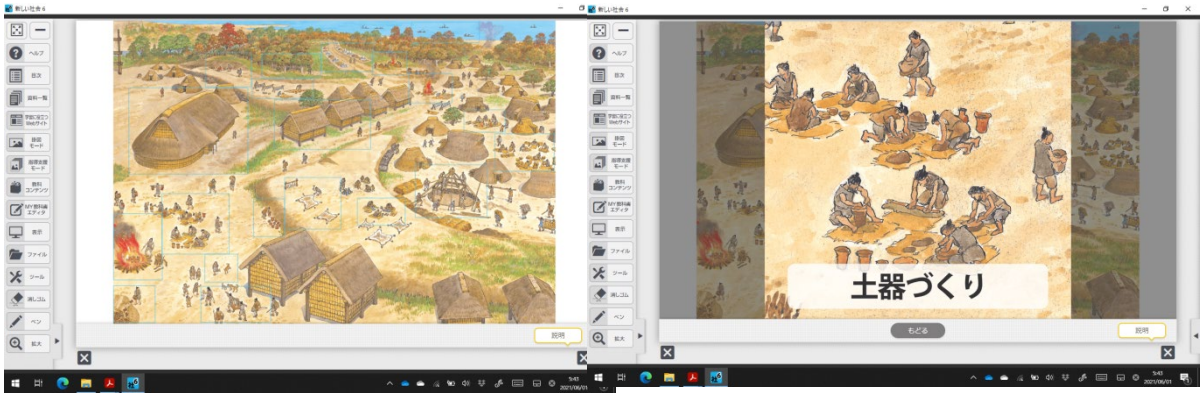
だから、というわけでもないだろうが、現場の先生方の間では教科書を使わずに授業を組み立てることが多いようである。例えばこの単元でいうと、上記のように豊富な資料を見せて児童の「**気づき**」を促したいところだが、教科書の本文にはその「発見」の数々がすでに書き込まれている。いわく、竪穴住居に住んでいた、採集生活を営んでいた、石器や土器を作っていた等々、顔絵の子ども 6 人がそれぞれの「気づき」を話し合い、それがこの単元の「**まとめ**」にもなっている。教科書の書き方としては巧みなやり方だが、主体的・対話的な学習を目指す先生からすると、児童に言わせたいことが教科書にはもう書かれているので、教科書は敢えて使わず、児童には掛図で資料だけを見せて、「気づき」を話し合わせ、「まとめ」につなげることになる。つまり教科書の出来のよさがかえって教師の自主性ないしアクティヴ・ラーニングの可能性をつぶしてしまっているのである。

つぎの弥生時代のページをみると、「**調べ学習**」のコーナーがある（下図左）。



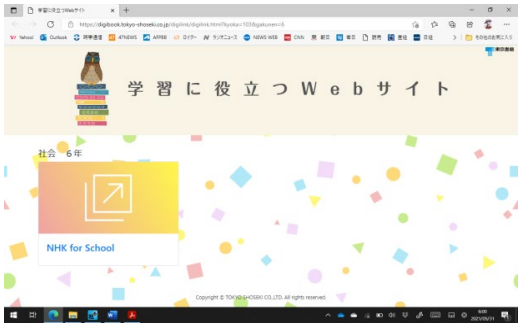

これは一見、児童が思い思いに書き込むようにできているようだが（左側のタブにペンと消しゴムもある）、タップして拡大すると①②③の内容を順次タップして出すだけのしかけである（上図右）。

また右下は一応「まとめ」ではなく「まとめ方」となっていて、ノートやカードにまとめるとか、既習の用語を使って書くといった「**学び方**」を指南する内容になっているが、ここにいう「12～15 ページ」の縄文・弥生遺跡の「想像図」から、それらの活動を教室で展開するには、相当な実力が求められるだろう。




これは 12-13 ページの三内丸山遺跡のくらしを描いた想像図だが、「コンテンツ」を押すと各場面に枠線が現れて（上図左）、枠内をタップすると拡大図が出てくる（同右）。ここまで細かく書き込まれると、児童は一々「これは何をしているの？」と疑問に思うだろう。その一々の解答が指導書などに書いてあるのか私は確かめていないが（ちなみに左のタブの「指導支援モード」は起動しない）、熱心な先生なら縄文土器の制作過程を解説した本やサイトを探して読み込み、それを頭に入れて授業に臨むだろう。それは大変な手間である。

歴史という教科の性質上、原始・古代から始めるのは当然のことであるが、従来これが社会科 6 年次の冒頭に置かれていたことで、現場では少なからぬ負担とされていた [3]。現行の学習指導要領でも、前節にふれたように、小学校の歴史では人物と文物「先人の業績、優れた文化遺産」を理解し、かつ「人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え、表現する」アクティヴ・ラーニングが義務づけられたうえに「博物館や資料館などの施設の活用」による「遺跡や文化財などについての調査活動」や「内容に関わる専門家や関係者、関係の諸機関との連携」が明記され [4]、小学校教員にはいわば**学芸員のスキル**が求められている。原始の内容はほぼ遺跡の調査結果に基づくものであるから、現場の先生方には大変負担の重い単元といえるが、デジタル教科書の解説動画はその負担を軽減する役割を担っているといえよう。但し上記の指導要領の要求に即して「博物館や資料館などの施設の活用」および「専門家や関係者」への取材を試みるならば、三内丸山遺跡などは容易に見学できないから、当然**インターネットの活用**が必要不可欠となる。




ところが、この教科書の左のタブにある「学習に役立つ Web サイト」には現在「NHK for School」が用意されているだけである（左図）。NHK の動画はこの教科書に盛り込まれている解説動画を少し長くした内容にすぎないから、「調べ学習」の広がりが乏しいというより、内容的に重複する部分が大きい。この点は本研究の濱川論文でも指摘され

3　井上亘「古代史研究と教育のいま」(『日本古代史の方法と意義』勉誠出版 2018 年）四（2）参照。
4　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示)』(日本文教出版 2018 年）58-9・63 頁。

ているが、ネットリテラシーを確立したうえでネットの情報を活用する「調べ学習」の指導法を模索してゆく必要があるだろう。

筆者はこの点について、昨年度のオンライン授業の経験から簡易な便法を提案した[5]。それは「ハイパーリンク」の機能を通じて「博物館や資料館などの施設の活用」および「遺跡や文化財などについての調査活動」を盛り込み、かつ専門家の解説を視聴したり、辞典類をも引く「主体的な学び」を実現することで、リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性を探索したものであるが、この方法は小学校に導入される１人１台のタブレット端末でも容易に実施できるだろう。

以上、小学校６年次の歴史の巻頭に当たり、かつ最も指導が困難な単元を例にあげてデジタル教科書の問題点を述べてきたが、使ってみると明らかに開発中の製品であり、その価格設定にまず問題を感じるほか、本研究で提起する「考える社会科」の工具たりえているかという問いに対しても、きわめて不十分な出来であると結論せざるをえない。これは鎌田論文でも述べられているが、教科書会社と社会科教育および歴史研究者が手を取り、共同でこの課題の解決に取り組むことが重要な問題であろう。

【付記】本稿の作成にあたり本学「令和２年度授業改善等研究費」の助成を受けた。

5　拙稿「人文系オンライン授業の開発：リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性」『教育研究実践報告誌』第４巻第１号、2020 年９月、39 頁以下参照。

本学リポジトリ：https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/よりダウンロード可能。